

日本家族看護学会研究促進委員会主催
第1回家族看護学研究セミナー
「家族看護学のエビデンスを研究・実践・政策に活かそう！」

開場日時：2017年3月18日（土）10:00-12:50

場所：東京大学本郷キャンパス情報学環 福武ホール

基調講演：「ナラティブ・メディスン患者と家族とつむぐ医療」

栗原幸江先生（がん・感染症センター都立駒込病院）

シンポジウム：「家族看護学のエビデンス構築と研究・実践・政策の輪」

児玉久仁子先生（東京慈恵医科大学附属病院 家族支援専門看護師）

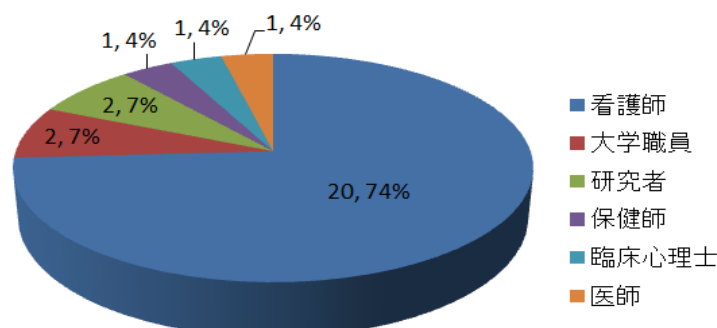
小林京子先生（聖路加国際大学）

池田真理先生（東京女子医科大学）

参加人数は57名（会員数39名：、非会員数：18名）であり、アンケートに答えてくださった人数は31名であった。まず基調講演では栗原幸江先生が「ナラティブ・メディスン患者と家族とつむぐ医療」というテーマで、事例紹介やグループワークを取り入れながら、同じ病状、予後、治療でも患者にとって捉え方は違い、患者が持つ主観的な認識や思いに医療者として耳を傾ける重要性をお話いただいた。シンポジウム「家族看護学のエビデンス構築と研究・実践・政策の輪」では、児玉先生より臨床現場における患者・家族・医療者を包括的に関わるシステムアプローチの必要性に関するご講演いただき、次に小林先生より臨床への疑問をどう研究としてまとめるか・研究者に必要なパブリックポリシーについて、お話いただいた。最後に池田先生より保助看法等の実際に関わられた政策の例を基に、臨床・研究の知見をどう政策に活かすか、研究として「見える化」の重要性をご講義いただいた。その後、臨床看護師、研究者、医師等の多職種の参加者と共に、積極的なパネルディスカッションを通し、臨床・研究・政策のつながりや循環に関して理解を深めた。

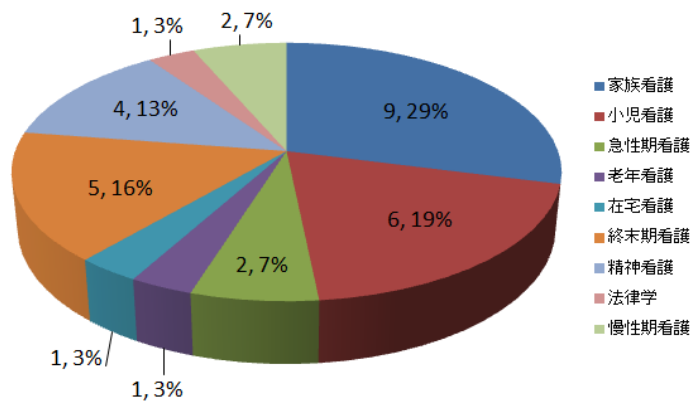
下記が、セミナーのアンケート結果である。

1. 職種



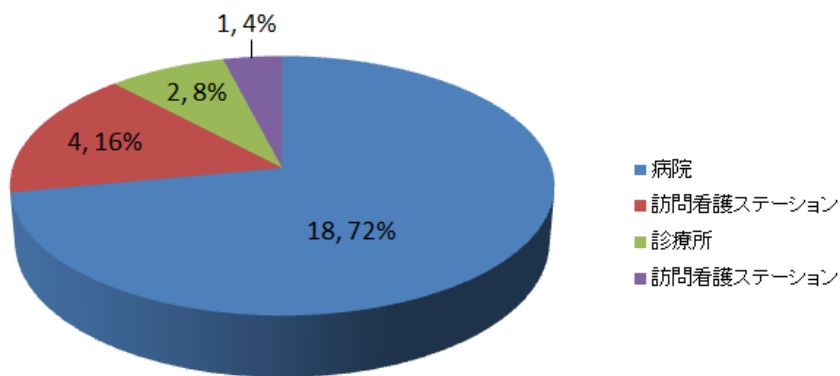
回答者の職種について、アンケート回答者の内、74%（20名）が看護師と最も多く、次いで7%（2名）が大学職員、研究者であった。

2. 専門領域



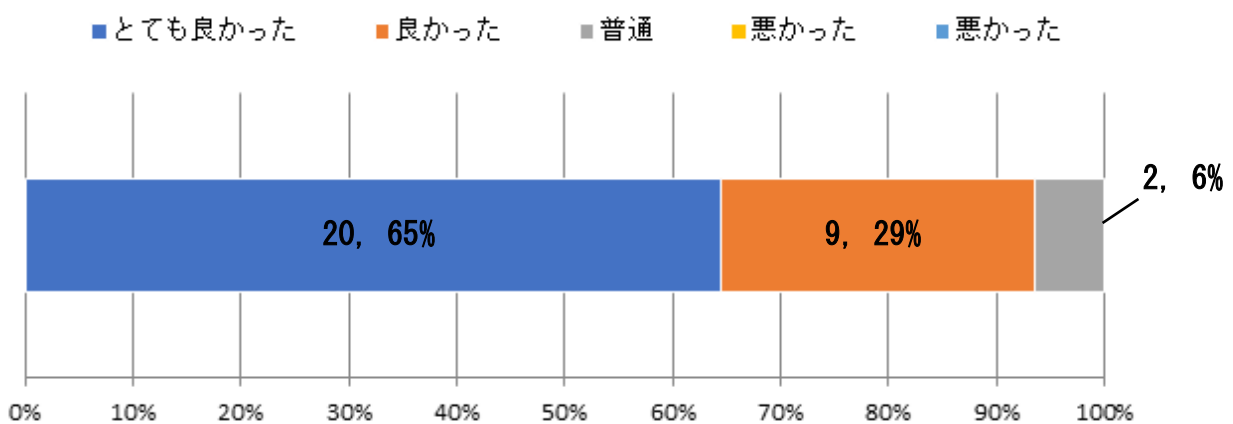
専門領域に関しては、家族看護が 29%と最も多く、次いで、小児看護（19%）、終末期看護（5.1%）、在宅看護（13%）であった。

3. 所属

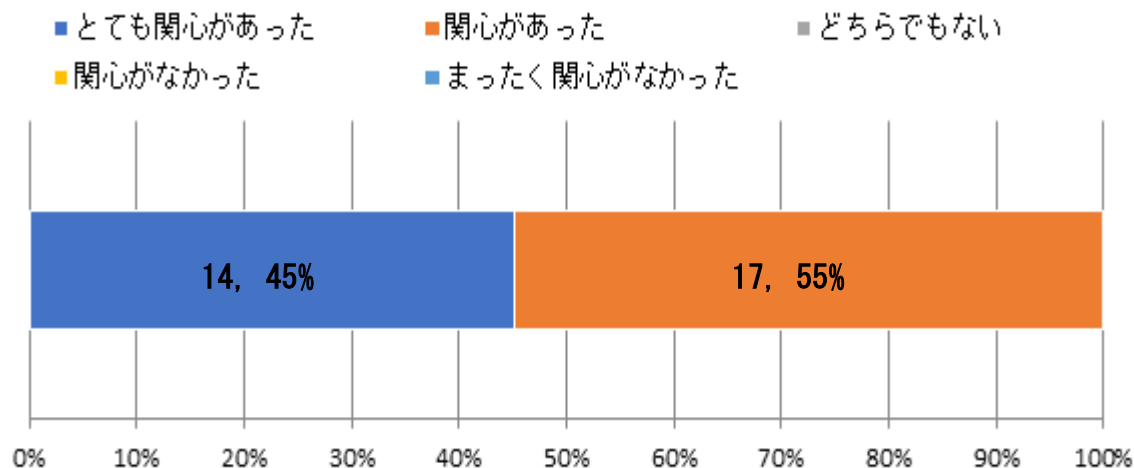


所属は病院が 72%と最も多く、次いで訪問看護ステーション（16%）、診療所（8%）、訪問看護ステーション（4%）であった。

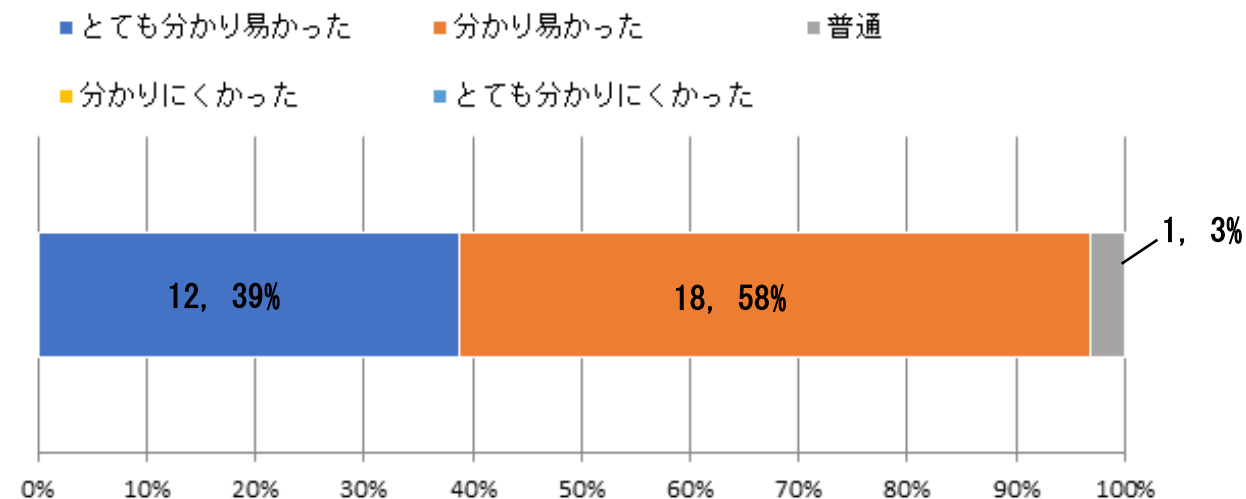
問 1. 企画全体に対する印象はいかがでしたか



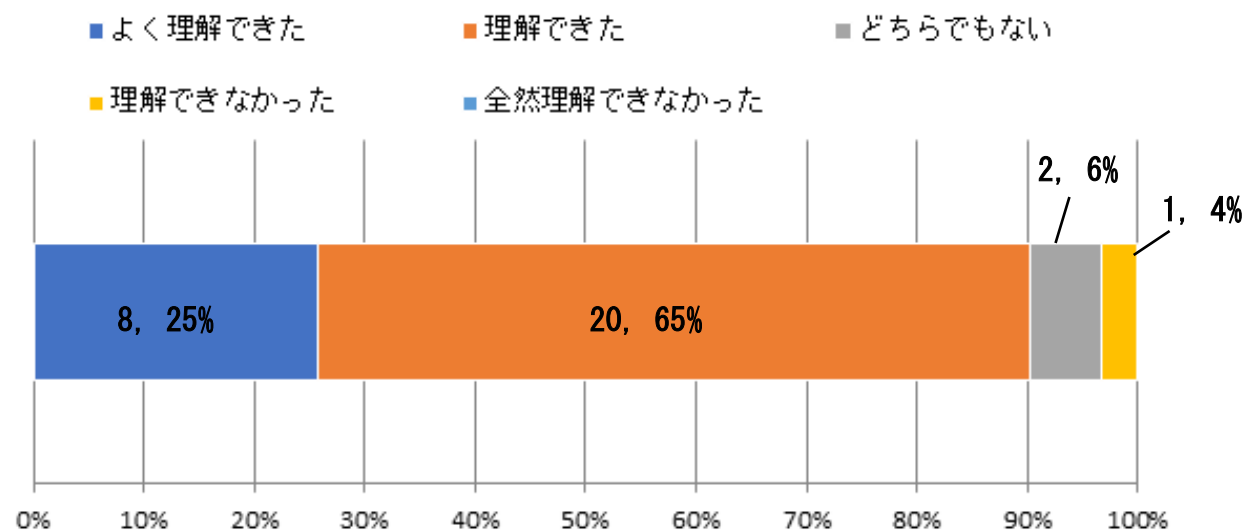
問 2. 企画の内容は関心のあるものでしたか



問 3. 企画の内容はわかりやすいものでしたか



問 4. 家族看護エビデンスの構築と研究・実践・政策への活用に関して理解できましたか



問 5. 今回の企画内容の感想やもっと詳しく知りたい内容やがございましたら、ご自由に紀ご記入ください（自由回答）

1) 臨床現場での家族看護学の展開と事例

- ・児玉先生のシステムアプローチをもっと学びたかった。
- ・ナラティブ・メディスンについてもっと知りたい。
- ・まだまだ現場では家族看護がうまく機能していないため、知識を高めて病棟全体で家族看護力を高めていきたいと思う。
- ・家族とのかかわり方など現場に生かすにはどうしたらよいか。児玉先生のような事例が非常に興味深かった。

2) 家族看護の研究・政策への活用

- ・家族看護のエビデンスをもっと詳しく知りたい。
- ・見える化の後にどのように行政や立法につなげていくか等、もう少し政策過程を知りたかった。
- ・実践の場と政策の解離を感じる。国の政策が優先し、現場で働く看護師は振り回され、点だけしかみえずという状況にある。本日はボトムアップの大切さが語られたが、現場の看護師たちは研究や教育からほど遠いところにおり、それをいかに具体的に結び付けていくにはどうしたらいいのか知りたい。

3) 感想など

- ・資料がほしかった
- ・会場案内が分かりづらかった。
- ・シンポジストの発表時間やディスカッションの時間がもう少し長いほうがよかった。
- ・家族看護学会の中で、事例の助言を受けられるようなシステムがあると非常に良い。

問 6. 今後、希望されるテーマについて

- ・病棟看護師と地域保健師の連携の在り方
- ・終末期看護、家族へのブリーフケアに関する研究や実践、理論
- ・事例研究のまとめ方や、研究・実践・政策の企画に関する内容
- ・レビューの方法